

川柳雑誌

最高權威の月刊柳誌
 人生勉強の標識燈
 人生路郎★主宰

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る
 昭和十四年一月十五日發行 第十六卷第一號(毎月一回十五日發行)

★兵士は戦線に！ 我等は銃後！！ (國民精神總動員)



14/1

180

第十六卷 第一號

每月十五日發行

菊正宗



店商納嘉本 會社株式

ライオン歯磨

も果効・も香・も味
！一隨代當



詣初てげ舉を國

六日より十日迄武運長久戰捷祈願 福小判授與
千圓・五百圓 割増金付債券が當る福引付切符發賣 關中主催
官幣大社 福波・汐見橋・惠美須町にて

住吉神社

元旦歳旦祭 三日元始祭
四日福餅神事 六日初卯祭
七月初辰祭 白馬神事
十二日若宮八幡祭

御陵めぐり・陶器八景五社めぐり
楠公史蹟・岩湧山等十數コース
ハイキング割引

初旅

南紀
樂園

白濱・湯崎温泉

(黒潮列車元旦より五日迄毎朝難波九時發)

龍神・椿・湯峯・勝浦温泉

國立公園

熊野 三山めぐり割引 (甲 九圓六〇錢
乙 一四圓七〇錢)

高野山

(スキー割引 二圓五四錢)

新和歌浦・加太・辨天島
紀三井寺・淡輪・天見温泉 食事付割引
長野・三日市町

車電海南



掲載内容の擴大

有保證新聞紙法の刊行

遊戯的作句態度の川柳は別として私達の川柳は社會批判、人生批判に基礎づけられた人間陶冶の詩であり、超穿ち、超リリツクの詩であり、形から云へば十七音字中心の短詩であるからホントの人間詩を建設するためには現在の如き無保證新聞紙法の法的縛縛の下に刊行してゐるは批判的記事、報道的記事に於て隔靴搔痒の感があつて萬全を期し難い。

ホントの川柳は詩や短歌の如く純正リリツクの範圍を出なかつたり、俳句の如く隱遁的敘事詩であつたりしてはいけない。生きた社會にぶつつかつて行かなければならない。人生の何物であるかを知らなければならぬ。人間自らの抉剔に忠實でなければならぬ。そのためには凡俗溷濁の渦中に投じて眞の人間を琢き上げねばならぬ。眞の川柳は人間陶冶の完成にある。

不朽の句抄

麻生路郎

勸題(〇五)

朝陽映嶋鷹の船西さして
朝陽映嶋すがすがしくも齒磨粉
近衛内閣總辭職

磨一步退き小手をかざしたり
政變へ親分の名が一寸出た
平沼騷一郎男に組國の大命降る

ボタンをうけて獨身知れわたり
留任の交渉チエツクされてゐる

る。これが資料の提供並びに體驗の發表の自由は有保證新聞紙法による柳誌でなければ不可能である。

十六年前、川柳の社會化を提唱し、その機關誌として刊行された本誌は既に創刊當初に於てこの事を痛感してゐたのであるが、社内外の事情に於て容さざるものがあり、隠忍これを久しくしてゐたのであつたが、過ぐる昭和十一年二月、本誌第十三卷第二號「掲載内容の擴大化」の記事の如く第三號より有保證新聞紙法に據り刊行、偶々二・二六事件に際し、潑刺たる誌面の展開を見せ、柳誌としての獨歩の地位を獲得した。

しかしながら、その七號を一轉機として本社改組問題を惹起し、これが素因をなし遺憾ながら十號を以て再び無保證新聞紙法の刊行に戻つた。當時の「編輯縦横」の一項を抜萃すれば「十月五日に本誌の掲載事項の種類が變更されたので本誌から再び無保證新聞紙法に據る刊行に戻つた。しかしそれがために現在の經營には何等の支障もない。ただ將來を考へて有保證誌にしたのであつたが、まだ其の機が充分熟さなかつたものを見る外はない。尤もいよく必

要に迫れば明日にでも再び有保證にするかも知れない。」と書いてゐる。

今や防共膺支の聖戰に國を舉げての總動員、私達ペンを持つて起つものも又思ひをそこに致し國法に違ひ國策に沿ひ、戦線ミ銃後を繋ぐ柳誌としての完璧を期すれば勢ひ「時事を掲載し得ず」の國法に突き當る。眼を街頭に轉すれば多くの趣味雑誌文化雑誌にして、今時出版法を無視して顧みず、時事の混亂時代を出現せるに慨し、我社はすんでこれが範を示すべく本誌より再び掲載事項の種類變更をなし、時事をも自由に掲載し得る有保證新聞紙法に據る刊行にしたのである。

二千五百九十九年、躍進日本大陸發展への新春に際し我社は茲にこの一事を報道するさへ欣快措く能はざるものがある。今後の本誌に期待されんことを切望して已まない。

川柳雜誌

一月號 目次

表紙寫眞(大同・石佛) 岩崎柳路

宋哲元の別荘

麻生路郎(六)

軍事便・映畫

林佐市・塚原正光・宮尾しげを

小寺鳩甫・奥村丹路・生方敏郎

詩人 讀と横綱

高鷲亞鈍(六)

復眼 詠の心理

澤井香月(七)

満洲のお正月

梅本秋の屋

武玉川三篇研究(二) 森東魚(四)

驚く精神

奥村丹路(三)

評 近作柳檣から

福田山雨樓

西田岬樂(五)

女 三十

森東魚(二)

街に住めば

高橋かほる(二)

街の句帖

正本水客(二)

僕一流の雜談

不死鳥(四)

不朽洞句抄

麻生路郎(一)

近作柳檣

麻生路郎選(八)

川柳塔

諸家(三)

一羽子板

森東魚(四)

集牛 襟

吉田水車(二)

各地柳壇

(一)

同情週間川柳大會

德里記 豆秋

川柳案内(〇〇)

川柳書架(二)

後記(〇〇)

社關係の人々(三)

飛燕往來 諸家(三)

柳界展覧

家(三)

川・協

(一六)

柳人素描

(一七)

(三)中島紫痴郎君

(三)勝山しとし君

(二)

謹・賀・新・春

皇紀二千五百九十九年

川柳雜誌社



川柳塔

路郎選

大阪 麻生 葭乃

門松は無用常住座臥の門
餅一斗に春はゆたけし

安全地帯から眞正面なるネオン
出る事が不精な春にめぐり合ひ

あれも、あれも、あれもリタ嬢に見ゆる自轉車

大阪 橋本 緑雨

潮の岬

停電に煙管を出した運轉手

紀勢線にて

蜜柑山春が近づいたなと思ひ

四人のまわりブラットすぎができ

横濱 福田山 雨樓

箸をとる前に黙禱することとする

黙禱を終り箸へも感謝する

路郎先生の渡支豪賑視察

大陸の魅力へステッキだけ持つて

息子中學五年生で受験準備最中

早寝して子の勉強の灯に恥じる

體重十八貫、これ以上肥つては健康上

いけないと思ふ

身體だけ恥をかかない程肥り

通勤車中から秋晴の富士を眺めつゝ大連
にある壺三味線を偲ぶ同兄が蒲田にゐら
れし頃は其の二階から富士が眞正面に見
えてゐた

蒲田から通勤富士に迎へられ

日比谷公會堂で京大伴博士の講演拜聴して感謝

眞理てふ冷たきものに涙ぐむ

セーラーで夕刊賣る娘眼が涼し

大阪 高橋 かほる

立竊でいつそおかしい三枚目

三枚目口説くしぐさへ叩かれる

番附の好いここにある三枚目

子の寝顔炬燵を裾へ引いてやり

亀之池雪がチラ／＼降つて晩

計量器兵隊さんは四股を踏み

二上りが済んで火箸の熱い事

結納が来て床之間が明うなり

大阪 西田 艸樂

母親の愚痴を封じに汽車に乗り

工場竣工(二句)

焚初めをくべて煙突見上げに出

長期建設こんな小さな工場でも

大阪 永田 里十九

面白く嫁の話をと二三聞き

代用品まあ美しい鏡餅

もつちやりと大津繪等で座をにこし

結局は子の氣にいつた嫁をころ

大阪 奥村 丹路

母の愚痴を聴いてあけたき夜の火鉢

小切手と手形師走の風が吹き

炭をつぐ姿さびしやわれながら

有閑の酒なりあへて否定せず

白濱 行

水仙はさびしかたまりあふて咲き

銀行にて

怖しき趣味金屬と大理石

大阪 水谷 鮎美

妓のいのち君の眼鏡にうつる夜

母ひさりゐる座蒲團のほろ温くき

炙すゑてうれしき母の寝正月

勅題 朝陽映島

朝の陽へ鳥を飛びゆく宮鴉

大阪 姫田 夕鐘

三枚目舞台明るうして這入り

チョコボが白湯飲むひまがある三枚目

三枚目チョンチョロ短い刀さし

すつたもんだは六錢の電車賃

人名簿へ戦死と朱書するさびし

ブルスマイナス今年も王手飛車まで来

香水線香がつん抜けて来る茶屋の春

大阪 村松 夢裡

千人針を縫うて電車に乗り遅れ

先生と云ふ御名前の身だしなみ

むつとした顔で御世辭をきゝながし

名吉屋 吉田 水車

女事務見習と言ふお茶を汲み

ヒットラーの型でタクシー呼び止める

國策に沿うから買へと言ふチラシ

手袋のまゝでなけ込む慈善鍋

大阪 須崎 豆秋

名曲をかけてさみしい喫茶店
兵隊のめしを二箸三箸食べ
元日の飛行機低いミこをミび
レジスターお鏡餅の蔭になり

大阪 西 いわを

ハイカーの路を違へて春淺し

防共の波は東に又西に

正月は有馬の宿が白濱か

師走六甲登山

六甲も時局ラツパの音が聞え

大阪 後藤 青兒

親ミ子ミ並んで拜む二重橋

祝盃へ大成功の船ゆらぐ

愛着に沈めば窓に富士があり

歟やめて見る飛行機の頼母しさ

大阪 中西 おさむ

年賀状妻の身内へあらたま

炭ミりに炭一杯のお元日

お年始へ襖は軽う軽うあき

大阪 加藤 ライト

恩人の家を訪ねた事始め

金縁の奥に侮蔑の瞳を感じ

カメラ・犬次は豚かミひやかされ

盲目の子景色の中でいこ生まれ

鳥生 古弗

神かけて祈る部隊に友が居る

皇軍へすまぬ暖爐の暖かみ

大阪 正本 水客

凸凹の裸婦特選の額に入り

レコードの新譜かゝえてバスに揺れ

除夜の鐘母も昔の話する

豊中 黒川 紫香

聞耳をたてゝ制する手が動き

こんにやくをべら／＼させて又しやべり
ステッキを肩にしてゐる下り阪
参錢を値切つた妻の自慢ぶり

大阪 丸尾 潮花

ダムの風泣いて別れてそれつきり

前線へすますオーバー着て出かけ

馬も征く港の朝は霧が込み

大阪府高師濱 大坂 形水

正月のブラン怪しからん温泉地

衿立てゝ師走の雨の中走る

大阪 岩橋 双虎

若水をくゝんで明日へ身がまへる

あらためて武運を祈る初日の出

金澤 安川 久留美

寶舟ぜにのしまりは辨財天

門松ミ並んで寫す雪鬼

自嘲

四十八煎じてのます垢もなし

仁川府 池田 可宵

一すぢの煙がのこる島の影

朝の島無人島にはあらざりき

島はるか寶船ほぎ積んであり

兵庫縣御影 長崎 柳秀

寝轉んでみても淋しい濱の宿

洋傘部少しすざつてお眼にかけ

うちの子の聲もまじつて愛國歌

縁談へ耳を借さない補充兵

俺は行く俺につゞけミ部隊長

松山 酒井 大樓

捨身報國大陸へ大陸へ

宇宙の法則へ反抗をする制度

年の瀬を荷物の塵の中で越し

スタートは良し恵まれた時ミ運

今治 渡邊 曉童

瀧の音右に左に塔はるか

兵隊さんに遊ぶミころをおしへたけ

廣島 濱田 久米雄

やけで飲むわけをおでんやきいてくれ

百圓札利子の話に觸れるなり

順番に幹事解らぬ名を見つけ

課長まで漕ぎつけました便なり

やんわりミ出る術に男おだてられ

榮轉の家が八百屋に借があり

愛媛縣大洲 今川 棕影

齒磨粉今朝はゆつくりしてゐます

煙むさうにバットくわえて書きつゞけ

愛媛縣 橋本 克海

大工もう道具をしまふ唄になり

絶體安靜只この足が邪魔になり

醫師の眉見逃さない患者の瞳

絶體安靜單衣の脊中みんな抜け

絶體安靜だるまの方が樂だろう

この熱でよくまあ生きた體溫表

運でない餘生は神の呉れしもの

防火テ

我物であれミ物貨は國のもの

仕末して置けばよかつた火事ミなり

着せてやる算段正月も近し

明日へ事務残して共に飲み出る

なほさせませうミ家賃を手にくける

姫路 潮田 明坊



氏二省子



氏魚東森



屋の秋本梅

究研編三川玉武

(二五)

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(425) 此やうな顔してといふ顔は似す

東 魚 此様な顔などとしてと仕方話をするが、その先方の顔に似てゐるわけではないと云ふ滑稽であらう。

秋の屋 顔の字を二つ重ねたのは、紀逸が平素の好尚に合つた句である。

省 二 私共も世間話中にやる事で、多分似てゐないであらうが、話に興を添える。

(426) 奥へ召すのか武士のおとろへ

東 魚 女達の取締にされるのではないが秋の屋「奥へ」は女ばかりの居る奥御殿への意で、此處へ召されるのは、奥家老その他老人が多いのである。

省 二 奥へ召さるゝ武士の衰へ、とすれば一層判る。

(427) 草履へ飛んで下る棚經

東 魚 何軒も廻らねばならぬ棚經の僧が、經をすまして急いで立去るさまであらう秋の屋 倉皇として心も尻も落附かぬ、所化僧のさまが表現されてゐる。

省 二 氣ぜはしさ、お茶を呑む也直に飛

び下りる。

(428) 解けは妾の氣に障るなぞ

省 二 謎は解かぬに興あり。殊にお妾さんなどには、障りのある謎は多いのだから。

東 魚 成上り者の妾には、謎の解けぬところが面白い。

秋の屋 あからさまに解いたならば、妾の耳の痛いこともあるに相違ない。

(429) 局の部屋へ狐なくなる

秋の屋 昔は稻荷降しといふ事が、奥御殿などに行はれたといふが、そのやうな事かも知れぬ。

省 二 さうかもしれぬ。で、狐があなくなつたのであらう。

東 魚 ちさき狐など管狐など云ふものを使つたと云ふ事を聞いて居る。それかも知れない。法師が局に招じられた場合かも知れぬ。

(430) 房までもむやつく室の長枕

省 二 「むやつく」が判らぬ。室には二つ意がある。一は寢所、他は播州室津。(むや

つくは情炎的な感じはするが)

東 魚 室津の方であらう。むやつくはわからない。濃厚な氣分をそゝると云ふやうな意味合ではなからうか。

秋の屋 男女痴話口説とも想はれるが、どうも判明しない。

(431) あきらめて居る口へ人參

東 魚 死を覺悟しあきらめて居るのに、はからずも人參をのまして貰ふ事になつた。してみると人生への執着が出てくる。

秋の屋 現今ならば強壯劑の注射といふところ。

省 二 人參が珍重された昔の事、精神的に効能多大であつたらう。私など他から貰らうので服用もするが、別に感じはない。「人參が効いて冥土の物語」(古句)。

(432) 追話で見てまた後家でなし

省 二 凡そ若後家などは、追詰めてみれば、その心持ちは判りきつて居る。三十後家は立たぬと云ふ。

東 魚 夫を失つて後家で居るが、其性根は後家になりきつてない。まだ色氣がある。

秋の屋 髪などを剪つては居るが、まだ心までは後家でなく、浮世に未練がある。

(433) 棒突は欠ひの顔を水かきみ

東 魚 警護巡視に當る棒突も、事故もなく退屈ゆえ、水たまりにたま／＼欠ひの顔がうつる事もあらう。

秋の屋 武家屋敷の門前や玄關前などに、積み重てある篩手桶の水を、棒突が退屈の餘りに、顔を映して見るとであらう。

省 二 篩手桶はいつもあるのだから、水を鏡にするに都合がよい。

(434) 三味せんを隣をうらむ山さくら

省 二 隣りで三味線入りの大騒ぎでは、ぢむみりと山櫻見も出来ぬ。

東 魚 俳諧か和歌でも試みやうとする處に、三味線で騒がれては苦しい。

秋の屋 花見幕一重を隔て、一方は動一

方は靜。

(435) はたけは匂ふ宇治のさむしろ

東 魚 茶の良い香が庭にしみてゐるからであらう。清々しい感じの句である。

秋の屋 麥や豆穀を干す、田舎の狹筵とは大に趣が違ふ。

省 二 總てが匂ふ宇治の世界。

(436) 心程行かれぬ年の茶碗うり

省 二 少し年とつた茶碗賣か。

東 魚 年の暮の意ではないか。方々へ行き度いが破れ易いものであり、無闇に急ぐ事も出来ない。

秋の屋 年齢でなくて歳晩に相違ない。

(437) 見立違て夜を長く寝る

東 魚 他の醫者にかゝつてみたら、診断が違つて安心出来て、夜長さを長く寝られたとであらう。

秋の屋 庸醫の藥を服用しても効驗がなく、苦痛の爲に夜の速く明けるのを待つのだと想ふ。

省 二 明けるのが待ち遠いのであらう。

(438) 蚊かたかる取あけ婆々の足のうら

省 二 取あけ婆さんには一種の臭さもある蚊もたかる。足の裏は見つけどころだ。以て婆さんの姿態も察せらる。

東 魚 取あけ婆が膝をついて、足は爪立て、はつ立て尻で何かしてゐる有様が想見される。

秋の屋 妊婦の分娩を待つ取あけ婆であらう。

(439) 舟引の筋違ふ形りに雨か降

東 魚 高瀬舟であらう。みの作君の句に「つんのめるやうに高瀬は曳いて来る」といふのがあるが、その斜になつたと同じやうに雨も斜に降りそゞろ光景であらう。

秋の屋 高瀬舟には限らず、淀川の三十石舟も同様で、之れは場所を限定せずとも宜しい。

省 二 繪でも、この句同様に描かねばならぬまい。



松坂俱樂部

會員募集

あらゆる趣味のお稽古場

手はごきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

お稽古
種目

- 長唄 常磐 尺八 舞踊 謡曲 小唄 能楽 鼓
- ピアノ 聲楽 書道 茶道 華道 料理 洋裁 俳句
- 氣道 棋道 松坂レコード 吹込

川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當

川柳講座

御申込は
七階松坂俱樂部
電話(表代)三〇三〇番

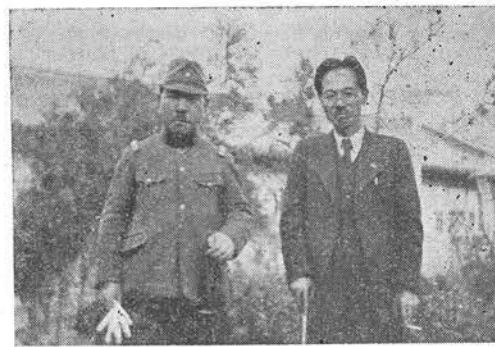
松坂屋

大阪 日本橋

- (440) 母は半に 戻る 輕業
- 省 二 輕業のやうな危險なものは長く見物して居れぬ。亡母など「母は半に 戻る チャンバラ」であつた。
- 東 魚 二 母は半に して心配でみてゐられない。かう云ふ昔風の母親はもう今時はない。
- 秋の屋 二 老人の氣の弱りである。
- (441) 葬のさきて 結れる みたれ 髪
- 東 魚 二 寐みだれ髪を縁先きで結ぶ。其眼前に葬が咲いてゐるのであらう。
- 秋の屋 二 早起の女の身窄なみである。
- 省 二 前「の」字を書いて「さき」とルビすればよい。
- (442) 一口の湯も 養生のはし となり
- 省 二 お湯でも滋養分はある。私は宿病が愈々重くなつて、此數年素湯許りである。
- 東 魚 二 素湯も亦一種の味ひがある。毎に鐵瓶の湯はうまい。蕪村の「秋立や素湯香はしき施葉院」が聯想される。
- 秋の 二 私は素湯が大嫌ひで、藥なども番茶で服用する。江戸時代の人達は、素湯は坊主臭いと云つた。
- 省 二 亡母は「このお茶は坊主ぢや」と平素よくいつた。お茶が出なくて素湯同様の意。
- (443) 世捨人むかしの氣にて 夏を待
- 東 魚 二 昔の氣とは世を捨てぬ前の心持ちを云ふのであらうから、物皆潑刺としてくる夏に近く、昔の心持ちをそゝられるとであらうか。
- 秋の屋 二 夏を待意が解らぬ。
- 省 二 春を待つなら解し易いが、夏ではビツタリせぬ思ひがある。
- (444) 蘭の香に 出入心も うつくしき
- 省 二 蘭好の風夢であらう。
- 東 魚 二 この「出入」は單に自分の家の出入りにつけて云ふだけであらう。君子に比せられた蘭の香に、心もすが／＼しく家を出入する事である。
- 秋の屋 二 この「出入」は自分一人ではなく、他人でもあると思はれる。
- (445) 掃出せは 廻つて 這入 蝸牛
- 東 魚 二 玄關先きなどへ、隅に蝸牛が居たのを掃き出したら、又箒先から遠く廻つて這入つてきたと云ふ場合か。遅々としてゐるやうで、何時の間にか、こんな所へも來てゐると思つた所を捉へたのであらう。
- 秋の屋 二 草庵のやうな閑寂の處らしい。
- 省 二 蝸牛は速力に於てはナンバー・ワンだと科學欄にあつた。
- (446) むかしのさらぬ 人形の貌
- 省 二 人形も古くなれば汚損もして「古雛の一年ましに憎がられ」(武十六)などとなり。未は捨てられもする。然しどんなに汚損しても昔の面影は残る。
- 東 魚 二 今出來の人形でも、顔はどこか昔風の趣が傳つてゐるとの意であらう。
- 秋の屋 二 古い人形の顔は、何となく間の抜けた處がある故、それを「昔の去らぬ」と云つたものらしい。
- (447) 池上 参り 珠數の ふり合
- 東 魚 二 法華宗徒の長い珠數を互に持つ。連れ立つて參詣する仲間が、それ相應に見事な珠數を、一つは見得に持つて行く。「ふり合」は珠數を振るの意ではなく、仲間のつり合の方の意と思ふ。
- 秋の屋 二 無論珠數の「振り合ひ」ではないが、つり合ひも少し變である。他に適解がある。
- 省 二 競争意識的にお詣するのであらう
- 秋の屋 二 萬一競争的に參詣するのならば、「ふり合」でなく「すり合」であらう。
- (448) ゆさばりに 小僧を 乗せて 誤らせ
- 省 二 轆轤に乗せられ、小僧降參する。
- 東 魚 二 乗りつけぬものは一寸アランコに
- は降參するであらう。座頭を木馬にのせるといふ川柳があつたと思ふが、似通つた趣である。
- 秋の屋 二 座頭の木馬の方が、滑稽味多くて小僧の轆轤よりも面白い。この小僧は商家ではなくて、寺院のであらう。
- (449) 人みせに せぬ 孝行は 人か 知る
- 省 二 本當の孝行は、やがて人に知られる。
- 東 魚 二 あんまり親が偉いと目立つた孝行は出來ない呵々。
- 秋の屋 二 孝行を賣物にする偽善者もある。
- 望 樓 之 部
- (450) 可愛 かれて 今に 牢人
- 東 魚 二 白井權八の亞流であらうか。
- 秋の屋 二 粹が身を食ふといふ俗諺にあるやうな男であらう。
- 省 二 かくなれば浪人も、まん更でなからう。

武玉川研究(十二月號)正誤表

頁	段	行	誤	正
六	一	一	水入して	入して
六	一	一〇	喜多言	嘉
六	一	二四	口で	て(原本)
七	三	二七	四野	書



北支派遣連隊部員(昌)川内隊部連連派支北 (37)

宋哲元の別荘

北支蒙疆の印象(Ⅱ)

麻生路郎
岩崎柳路



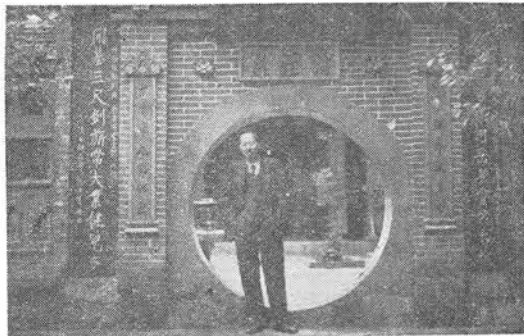
張家口軍醫院の兵士の家の間の品物 (38)

十月二日、柳路君と私は北京を發つた。蒙疆の人口、南口站は激戦地だったそうだが、今は停車してゐる間に、名物の柿が味へる。北京の東單市場で一個三錢した柿がこゝでは一錢五厘で買へる。同じ柿が張家口では八錢もするそうだ。

北京で柿を買つた柳路君はこゝでも又柿を買つた。そして私の集印帖と自分の集印帖を抱えてプラツトフォームをあちこちした。旅人はみなこゝのプラツトで蒙疆銀行の札と兩替をした。

長城線居庸關、八達嶺の險を越へると雄大な高原が車窓に映つる。そして朔北の山々がいかにも異國の邊境であるといふ感觸を與へる。小站(站は驛のこと)が随分澤山あつたが、その小站と小站の距離が相當に離れてゐる。

行つても行つても、北は陰山山脈の支脈が續く。南方は見渡す限りの畑地である。人の姿は一人も見へない。こんな邊境が何處まで續くのであらうか。こ



(39) 張家口馬兒山雲泉寺に於ける路郎主幹



(40) 馬兒山、宋哲元の別荘路郎主幹に腰を下ろしたる路郎主幹

北京を發つて七時間、汽車は張家口の市街へ、馬蹄形に迂回してすべり込んだ。車窓からはアドバルーンが見えた。それには「親日防共」の四字が讀まれた。流石に蒙疆三自治政

府の首都である。驛名には張家口站の外に、
「蒙古」と書かれてある。それはロシア語で「山の入口」といふ意味だと言はれてゐる。日本人は張家口、華人はチャンチャコウ、外人はカルガンと稱んでゐる。

東安大街の柳路居で旅装を解いた。旬日家をあけてゐた柳路君は家事で忙しい。私はたゞ一人後庭に佇立して蒙古の空を仰いだ。空には一筋の帯のやうな黒線が流れてゐる。それは天の川を黒く染めたにも等しい幅をもつてゐる。幾千幾万とも數へ切れぬ鴉の一群である支那兵の死屍が彼等の好餌であると家人に聞かされた。

張家口の市街は南北約一里餘り、東西十町足らずの細長い街で、南北に幅三百メートル位の清河の濁流が流れ、清河橋によつて區割され橋西、橋東と稱ばれ、橋東には日本人街が廣がつてゐる。橋西には堡砦があつて城壁を形ちづ

軍事便映畫



大阪市立天王寺動物園長 林 佐市

A 一徐州入城式當日午後三時小兵等も入城の光榮に浴し市の西方にある雲龍山上に登り國長様よりサインして戴いた記念の日の丸を打振る市街を見下し萬歳を叫びましたその時の歡喜感激は此處では御傳へ出来ません。

B 某金魚店出身青年勇士より材料不自由し小型寫眞でその日のスケッチが添へてあります。

B 上野動物園の實寫に猛獸映畫の色々を切り糺ぎ一つのストリーにまとめ編輯したものを見ましたが面白いと思ひました。輸入統制の事變下ではこんな方面を今少し突き進めて見るのも無駄なことでないと思ひます。

A 臥り處へ来る軍事便は慰問袋の調禮か便りへの返信で感激させられるものにはぶつかりません。

B この半年ニュース映畫を見る暇も持ちませんので語る資格を有しません。

宮尾しゆを

A 最近の中に「帝國軍人の一員として身を捧げることが出来る」は日本男子の本懐に隨喜して居ります」と云ふ事を書いてある、これはいづれの人もあつて、あの困苦を見てる手前、頭が下がつてしまふ。

B 理研の映畫で鐵砲玉の飛ぶのを見をハイスピードで寫したのを見

A 蒙古の方へ進撃の兵隊さんから他からの慰問品の雑誌から見たとての便りに早速慰問袋を送つたことがあります。

B 亞細亞の娘の支那將校のメー迷キヤブがモヤ／＼残るばかりです。

A 軍事便はどれもこれも私を感激させました。戦争が如何に人間の魂を純化させるかに思ひを及ぼすとき、私はそれらの郵便のどの一節をビツクアツツしやうかと迷ふのみでした。

B 舞踏會の手帖、路傍の石、五人の斥候兵等が夫々感銘をうけた映畫でした。どうも餘りに常識的な答案で恐縮です。

大船映畫の川柳は、作らぬことに致しませう。

生 方敏郎

A 今年一月三日の早朝漢口の宮下芳雄伍長さんから飛行便で賀作詩を頂きました。戦争の合間に意專念皇國のために戦ひ、手紙や感想文を送つてくれな

思ふといふ言葉あり眞に泣かされます。

くつてゐるけれども城内と云は
ずに華人達は堡内と呼んでゐ
る。

★
張家口に過ぎたるものが三つ
あると云はれてゐる。鐵橋の清
河橋、料理屋の塞樓閣、カフェ
ーのオペラがそれである。

★
滯張中に陸軍病院で皇軍慰問
の川柳放送をした。小川(昌)部
隊長が、先づマイクの前に立つ
て、「これから大阪の川柳雑誌
の主幹、麻生路郎先生が、川柳
のお話を下さる、開けーッ」と
紹介された。その聲は私の耳に
に號令のやうに響いた。陸軍で
はすべてこの式だそうだが軍籍
にない私には異様に感じた。

私は戦傷者に對し慰問と感謝
の言葉を述べた。以後の張りの
きつた状態を傳へてからなるべ
く朗らかな川柳を選んで解説を

した。尤も皮肉な句、深刻な句
のあることにも説き及ぼしたが
深刻な句の例證はわざと避け
た。

★
放送後、小川中佐のもとめら
れるままに短冊や雅帖に揮毫を
した。そして私も又中佐に記念
の一筆を請うたところが
太原に死ぬへかりしを
けふの月 小川靜觀堂
の一句を示された。時に仲秋、
感慨深きものがあつた。

★
皇軍慰問統後のことも少しひ

岩崎柳路夫妻等の案内で市街
の西北、賜兒山雲泉寺を訪ね
た。寺内の休憩室に頗る達筆
で

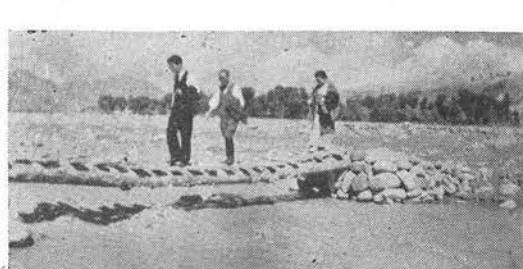
青山之不動 白雲自去來
の半折が貼られてあつた。在張

家口日本總領事館領事木瓶山人
と署名されてある。

寺内の観音靈籤を占つた。第

十三籤、上々である。遠く異境
に來た私の心を慰めてくれるに
充分だつた。

(42) 張家口清河の上流
路郎主幹 田中氏 岩崎松代女



に徹底した掠奪振りである。通
州の日本居留民會長が箸一本も
残さぬと云つた言葉を首肯する
ことが出来る。

★
宋哲元の別荘は他にもある。

現在張家口の公園となつてゐ
る水母宮がそれである。こゝ
には彼の愛玩した金魚の水槽
があるが、あの大きな幾つか
の水槽に金魚一匹遺されてゐ



張家口公園と張家口の別荘跡 (43)

天地無私到處春
笙歌嘹唳送輕雲
九天日月開宮殿
一樹天桃最可人
十五月初圓
冰輪掛碧天
驪人毫髮處 否泰在循環
功名達 病者安 占夢吉 醫
宜北 財源廣 行人至 胎孕
男 三日晴

★
賜兒山の中腹に宋哲元の別荘

跡がある。邸内に、日本兵によ
つて押し付けられたといふ大きな
抗日碑がある。碑文は土に面し
て讀むべくもない。家屋はその
まゝだが何一物も残されてゐな
い。ドアの眞鍮の把手は云ふま
でもない、錠穴の金具まで支那
側によつて掠奪されてゐる。實

★
北支や蒙疆で、ビールを注文
すると、アサヒビールの無いと
こではスタービールと云つて★
印のビールを出す。これは宋哲
元が經營してゐたビールだと柳
路君から聞かされたが、一寸氣
の抜けたビールでドヘンとした
味がする。そこで一寸抜けた人
間に、彼奴はスタービールだよ
といふ新隠語を用ひて笑ひ合つ
た。

(つづく)

満洲のお正月

澤井 香月

舊十二月廿三日夜、各家々で
電祭りが行はれます。此のお祭
りは俗に小正月と呼ばれてゐて
この頃よりぼつ／＼正月氣分が
出て來るのです。電祭りは日頃
電の上に飾つて信心して居る電
神の畫像を電の中に入れて焼く
儀式です。それから七日たつて
十二月卅日の夜、カマド神は八
百よろづの神様と共に下界に降
臨されます。其の夜各家庭では
屋内に先祖や財神の像にお燈明
を上げお供物を供へて一家團樂
して年を送り夜も更けて十二時
から二時頃迄の間に中庭に設け
た祭壇の前に家長以下家族全部
集つて接神の儀を行ふので大晦
日には日本の様に徹夜します。

大晦日日本の蕎麥を懷かし
この儀式は、陰暦一月元旦の未
明、しかも零下數十に下つた屋
外の中庭で行はれますが、司祭
者の家長は手袋もはめず、先づ
神位に被せてある神像の繪紙を
ライラ

爆竹の音戦でなし神來了
松の内は五日間で、一月五日の
未明、接神の儀と同じやうな送
神の儀を行つてお正月は終るの
です。それから一月十五日の夜
を中心し萬戶燈籠を掲げる元宵
節が行はれますが、元宵節は、
女小供のお正月とも云ふべき情
緒豊かなお正月の最後のお祭で
大變な賑はひ方です。

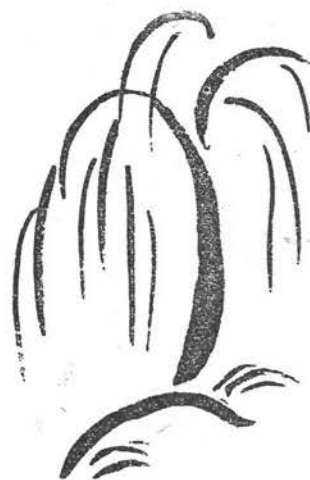
ごんかつの
うまさ寝てから
思ひ出し 仁兵衛



北
さくら橋ごんかつ 喜多八

選郎路生麻

酒の味身體の調子秋さなり のびきりをして買はされる鐵兜	同	
國策があれば是非なし服に下駄	大阪	夷一笑
日めりくを掛替へてゐる除夜の鐘	同	
若水をもう汲でゐる車井戸	同	
彈ぞめをひつそり聴く寢正月	同	
たのまれた襟を見立てる年の市	同	
咽喉佛有難相なお冷水なり	下關	櫻川不水
肯定をすれば手相見疊みかけ	同	
ヒロインの氣になり美容院を出る	同	
蠅螂の斧振り上げただけの事	同	
飲んで呉れど市場の海豚が躍つてゐる	同	
婦人客いつものお壽司電話かけ	張家口	小川靜觀堂
毆るやうに叩けばトラツク止まる	同	
秋深しお壽司にしようか二人切り	同	
コスモスの亂れし家を掃蕩し	同	
東北の夜汽車で行李一つなり	同	
親からの手紙で女中暇をこり	大阪	石井白面人
卒た頃の理想も遠い平社員	同	
長髪の垂れるを振つた懷手	同	
うれしさに泪があるも日本人	同	
火事しばし水に逆らふ様に燃え	同	
在天の靈々名だけを變へて讀み	石川縣	勝山とし
濠埋めて歴史を消して電車路	同	
見つかつて圖々しさの瞳がすわり	同	
カンフルへ安樂國が遠くなり	同	
乾盃へづらり並ぶは二合瓶	同	
それ程にうれしきものか子の笑ひ	大坂	畑田よし江



8

警刑の形跡を云ふ手なり

同創月

妻のへそ結が有冀い十二月

田 笠 石 鐵 同

前の人分も力んで多を行な
黎明の鐘は東亞に鳴り響く

橘本波夢造
木村比呂志



驚く精神

奥村丹路

しまった姿を思出す。

これは言ふ處の句評でもなければ、柳論でもない。川柳の友だちに、川柳を通じて、呼びかけ親しむベンの漫歩である。

私はまたいへん満ちたりた心で机に對してゐる。

机上にはついさつき刷れあがつたインクの香もあらたな川柳雑誌の菊倍判が豊かに私を待つてゐる。——この氣持は何かたのしい。

私は靜かに頁を繰る。

湯煙の中に旅館が浮び出し

緑雨

私も先頃南紀白濱を訪れた。久しく旅をせぬ私は、たつた一晚泊りの旅ではあつたが、まるで子供の様に、汽車に、海や空の青に、温泉の湯煙りに、樹々の緑に、歡呼の聲を擧げて旅のたのしさを全身に味はつてきたよきかな旅——。

何でも無い様な句ではあるが旅を解する者の知る喜びが溢れ出て、私のこゝろを旅へ旅へと媚惑する。

ウオツカー心は冬を見てゐた

鮎美

私は不幸にしてウオツカの味を知らぬ。何でもアルコールのパーセンテージの高い洋酒ださうな。むかしなつかしい小倉服の中學時代の或る正月、クラス中でもつとも文才に富んだ今は亡き友だち某が、このウオツカに酔ひ痴れてあはれにのびて

心境的の推移さだまりない。こゝろの落着きがほしい。このころひたにそれを戀ふ。

川柳・案内

大體活字十四字三行
金五十錢（行増すこ
とに金十錢）但し前金
切手代用可（但し前金
柳書廣告、その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢

川柳俱樂部

東京牛込區揚場町 川柳俱樂部社

川柳草薙

東京の代表誌
一部一〇錢 一年一冊（郵税共）
名古屋市中區八熊町寺田
發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
八
川柳きやり吟社

京

一部十錢 一年一冊
京都市西太田町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 みのく

一部十五錢 一年一冊五十錢
青森縣黒石町 川柳みのく社

川柳大陸

一部二十錢 一ケ年 二冊
大連市清見町一五一
川柳大陸社

春聯

一部二十錢 一年 二冊税共
大連市薩摩町一六一ノ二三
森崎方 春聯川柳社

蟬 蟬

一部十錢 半年 五十錢
大阪市旭區鳴野町三〇〇
蟬蟬川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五
八號相當の代價にて譲受けたし
川柳雜誌社内 BB生



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。



片瀬醫學博士
「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士 推薦
片瀬醫學博士 監査

カルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療時間
午前 午後
日 月 火 水 木 金 土 日 月 火 水 木 金 土 日

加藤謙一 佐藤多彦
北 北
3 8
1151

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂坂大

どんな底の生計子供があるばかり
迂闊に日を過してゐる間に、
雛節句三月の候には、父としての
の第一歩を踏む事になつてゐる
私に、この句は三誦して諒のあ
つくなるものがあつた。
子賢などと云ふ世俗的な言葉
が、身近かに分りかけて來たな
んて、私も成人したもんだと思
ふ。

雲々わく風の下の陶枕 久留美
この句を一讀して、私はまだ
く勉強が足りぬと思つた。し
ばらく此の句を座右にして、我
が川柳精進のよき刺激劑とする
事を許された。

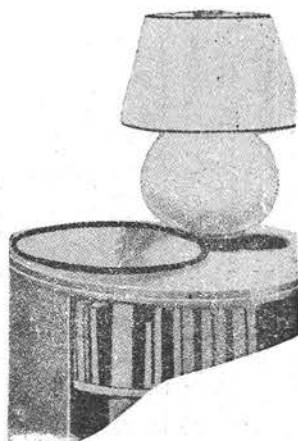
長期戦土壌へ草が芽を出した 宵明
去る日、はからずも宵明氏か
ら「軍事郵便」の朱印も鮮やか
に、嬉しい便りを頂いた。文面
には、私への激励と、氏の深い
前線川柳に對する憐れが、卒直に
語られてゐた。

とかく怠け勝の私に、これはよ
い鞭であつた。勿論私はよろし
く頑張る事を誓ひ、同時に氏の
戦場作句實踐がよき實を結ぶこ
とを希ふべく、便箋にペンを走
らせたのであつた。

——こゝまでペンの漫步を
づけてきた私は、ふと「詩の精
神は驚きの精神」と云ふ言葉を
思出した。誰の言葉か知らぬ。
或はものゝ本で讀んだのかも知
れぬ。
とまれ私達はこの驚きを得る
精神を持したい。
君見給へほうれん草が伸びて
ゐる 路郎
一筋の縄の姿も十二月 同
ほうれん草の生命力に驚き、
一筋の縄に驚く精神が、見事に
句になつた。
聖書一冊第一輪の書齋なり 路郎
吾が書齋でありながら、一冊
の聖書一輪の閑静さに驚い
てゐる精神、私はこゝに優れた
透徹した驚きの詩の精神を發見
して、甚だこゝろよい。
「詩人複眼」の亞鈍氏は、鉢巻
をしめ口をとんがらかし、十本
の足を以て中天に踊る章魚の實
在に、驚きの快談を叫んだ。
私は靜かに膝を打つた。
驚き得る詩人は幸ひなるかな
私は川柳を知つた喜びを新た
にし、且つは川柳に對する明日
への我が精進に、幸あれと祈り
こゝにペンの漫步をとどめる。

十三女

森東魚



ぶらりと川・維の事務所を訪
れたある日の午後である。ハリ
キリ老青年路郎は徐に、仕事を
片付けると私の方へ向き直つて
ニヤリとした。古い事の研究家
はどうも新しいものは餘り讀
んでくれぬと見えるね——實は
「參つたな」と、私は腹の中で

街に住めば 高橋かほる

吟行華やかなりし頃
「かほるさん紙おこなはれ」
と云はれても
「サー——」
とあげられる外出に紙を忘れた事の無い(たしなみよろしやろ)
私が吾彦の歸りに耳がかゆなりかんよりをしやうとすると紙を
忘れて來ました……ハンカチで耳もかかれずほんまに困りまし
た。

武玉川の論議の中だが、と來た
ので、私も俄に緊張した。彼氏
の云ふ處は次の如くなのであ
る。
三十に成ると女の世がすたる
(三編)

この句は、單に吾々が解釋した
だけの意ではなく、昔諸侯の妾
が其年三十になると御しとね御
断といつて寢所を共にしない事
になつてゐる。これは永く君寵
を恣にして遂には御家騒動を起
す様な事になる事など一つに
は慮つた事であるらしい。要す
るに、句の三十と云ふ意味はそ
れである。——これは先頃僕が

はしたのである。
彼氏は何處からあれを調べた
らう、歸りの電車内で私は苦笑
のこみ上げるのを押さへ乍ら、
其事を思ひつゞけてゐた——
「千代田の大奥」あたりかな
などと。

心に懸りながら數ヶ月を過し
てしまつた。處が先日フトした
機會に見たのが、三田村嘉魚翁
のお大名の話である。あつた
これに書いてあつた。

諸侯の奥向には面白い慣
例があつた、夫人の健康に拘
らず三十歳を越せば御しとね
御断といつて寢所を共にしな
い、夫人の御しとね御断と同
時に夫人の附女中の内から御
寵愛なさるべき一人を推薦す
る。(元)

街の句帳

□ □ □ 正本水客

大阪も南の盛り場、新世界の
大通りを一つ折れた店の大きな
立看板です。
葡萄 酒 一パイ 五せん
ボート・ワイン一パイ 十せん

×十一時も大分すぎて家路を
急ぐ道、お詔向きにカチ／＼と
向ふから夜廻りの拍子木。家の
方へ曲る小橋を渡らうとして若
い娘さん二人とすれ違ふ。今頃
と思ひ乍らと手許に眼をやつ
て吃驚してゐる間に、先頭の二
人が拍子木を小さくカチ／＼と
やつて通過しました。銃後の女
性としても之は少々危い夜廻り
さんだ。

その続き。これは研究すべき
心理状態だぞと一人悦に入つて
居た私は、ふと實に詰らない解
決案に到達してしまつた。彼
女はD電鐵經營の百貨店の店員
さんでした(二三・二一・一八)

近畿一の紅梅を沿岸に持つ紀
州のN鐵道の終點に新しく茶店
が開店しました。海南△△組合
より、〇〇検査より等として赤
い熨斗や鯛の繪に飾られたお祝
いさんでした(二三・二一・一八)



川柳の大家

川柳の大家 川柳の大家 川柳の大家

日時 昭和十三年十二月三日
場所 大阪朝日新聞社
三階大開間

年行事となつた師走川柳
大會の第二回が十二月三日の
夕刻から大阪朝日新聞社樓上
大開間で華々しく開催され
た。

既に斯道の戦士達はこの日
を待望し、定刻の午後六時半
には大入満員、確かに昨年の

となつた彼が戦線變り種五勇士列傳の記事となり、新聞紙上に報道されたことは既に讀者も、御存知のことと思ふ。斯くて事變下の大會の意義は定まり、主催者の面目愈々更まつたものと考へる。

戦線たりとも銃後たりとも吾々はたゞ川柳報國の一念あるのみだ。そこで獨に皇軍の武運長久を祈り、一天萬上に在す官居の方に襟を正して遙拜し、さて今は正面の席題を脱んで句作に没頭するだけだ。この一瞬會場の空氣はベンの戦士さながらに物凄い緊張裡に作句は續けられる。席題締切七時半、大會委員の手に寄つて句箋が集められた。

吾々は始めてホツとする。隣りの知人に私語する。椅子を一寸ガタつかすだけのものが斯くも多人數の集りだと互ひの行爲、動作が相當大きな雑音となつて、いやが上にも大會氣分を盛りあげた。

さて、席題の選句時間をつつ間、吾々は諸先生の講演を聴く事にしやう。まづ最初に昭和川柳社の主筆、堀口堯人の「二科展と新劇」と題する講演である。新協劇團の最近上演した「デッド・エンド」新築地劇團の「武蔵野」批評は流石に川柳人であれば言へない辛辣な劇評をもつてし二科展に對する洋書を論ずるあたりは、氏の獨壇場の觀あり、主として、洋書の素材から説きをこして、邦國の藝術家が西歐の畫家や詩人の物眞似を嗤ふ氏は、藝術家が國家

に盡す道は、國策的な作品を作るべし——藝術的良心を失はぬ限り——と論じた。

次に天晴れの司會ぶりをみせてゐる中西おさむ君は、神

午後六時——

新學期にバスを買ふ學生さんの列のやうに入場者がつゞく、つゞく「どうぞ一列にならんで下さい」と受付係大わらわ。(豆)

戸のふあすと川柳社の榎元紋太氏の登壇を促す。塊人氏が現代川柳人を代表するインテリのサラリーマンタイプの人であるとするとすれば紋太氏は體験の人だけに、どこなく古風であり、然し親爺臭い頑固さが多年の川柳道によつて灰汁がとれ、枯淡な風格を偲ばすのも、この人の得であらう。塊人氏が背廣服で、紋太氏が和服であつたことは演題にも現はれてゐて、背廣の珍らしかつた時代「大正時代の川柳」紹介があつた。明治時代の後半、久良俊翁や故人

南柳會の部長三南氏が十何人を引き具し、サツソウと來場すると、みんなが喜んで「キビキビしてるなア」(豆)

となつた剣花坊が川柳復興を目ざして以來、大正時代を現代川柳の芽生へた双葉時代であると語り、その頃の川柳と現代川柳の比較をしてから、大正初期に於ける柳誌二、三を擧げて、その作風と、運動

を話し、その頃の柳壇を關東關西に二分してゐた傾向を述べた。例へば關東の句風を代表するものにク緋撫子お七を焼いた原で咲くくがあり、關西のそれはク上燭屋へいへいといと逆はらずであつたと

曰ふ。まことに紋太氏の語ることは一つ一つがさきに講演された塊人氏と對照され、偶然にも新・舊の柳談を興深く拜聴できたのも、各派を一堂に集め得るこの種の會合であるからだつた。

二氏の講演が終ると、前日まで投句してあつた兼題の披「素天」と言ふ人の句が盛んに抜けてゐるので、何所の人かと思つたら何と名古屋から來た本物の「素天」さんだつた。(豆)

講が開始された。京都の川柳同人社の大島無冠王氏はあの朗々たる美聲で「土」の選句三十七句を讀み上げる。「家賃」は京都の京都川柳社辻井京二氏によつて、「白衣」は阪大川柳會の長崎柳秀氏、「乾盃」は昭和川柳社の小川百雷氏、「兵隊」は川柳雜誌社

の水谷鮎美氏が、それ〴〵得意の名調子で會場を酔はす。賞品係は各題の發表たびに、入賞者へ手渡ししてゐた。兼題の發表が終ると、祝電が公開され、市會議員の庄万よし氏が演説に銀へた際で諸君の名前を讀み上げる。

代つて、「北支蒙疆の挿話」と題して、當大會の主催者川柳人協會の理事長麻生路郎

「飛行機」 小西落丁選

(五)飛行機を下り大膽なことを云ふ 二南

(五)機上では鈴鹿が曇る裏が見え 鋭々

(五)銀翼へ我が子の視線力あり 菊人

(五)パラシュート要らぬ爆音續く 京二

(五)重爆機男の中の男乗る 一生

(人)飛行機を追ふ瞳に故郷の山が暗 是るを

(地)飛行機で来て少々はうそのもの 寄與史

(天)飛行機に顔を出したかくれんぼ 昇

(軸)重役もすつかり空の旅に馴れ 落丁

「頼母子」 河野夜王選

(五)頼母子を掛ける豫算に冬が来る 雨亭

(五)頼母子へやつぱり損をする生活 斗見

(五)あま酒をよばれ頼母子掛り去に 鮎美

(五)頼母子の話小使室を借り 豆秋

(五)大財布から頼母子の釣を出し 喜山

(人)頼母子を掛けて達者な老夫婦 かほる

(地)頼母子講貰つた便り露營の燭 桑岳

(天)頼母子の金とは云ひ貸してやり 連城

(軸)頼母子を落す氣である古稀祝ひ 夜王

「夫人」 寺井鋭々選

(五)洗濯をせぬ手重ねた令夫人 白面人

(五)何事か夫人へ巡査訪ねて來 喜彦

(五)社交室夫人の方が板につき 葉根子

(五)實印を捺すに夫人の手がふるえ 風葉

(五)戀を得て夫人歌境を逸したり 貴志子

(人)子を連る日夫人の名がそはず 某人

(地)ゆつくりと夫人自家用車へ歩み 柳太

(天)恐しい思案となつて夫人立ち 變人

(軸)趣味の家具といふが並で夫人室 銳々

「支那語」 石井白面人選

(五)片言の支那語で漢口復興し 一生

(五)轉業は支那語の本も買つて來る 彩泡

(五)片言の支那語で用をたす主計 柳秀

(五)片言の支那語土民をまごつかせ 里十九

(五)書に書いて貰ふ支那語や、解り 凡路

(人)成る程と思ふ支那語の字見入 塞々

(地)建設は長し支那語を志す 州鳳

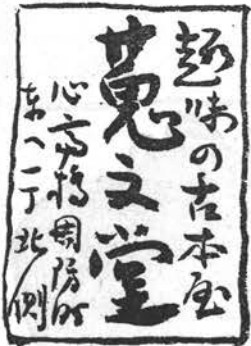
(天)支那語を何とかならう海を越え 某人

(軸)嘘を吐くのは都合の支那語 白面人

「兵隊」 水谷鮎美選

(五)水を呑む軍馬へ兵は話しかけ 朗々

(五)兵隊と歩きうれしくけつつまづき 寄與史



が最近の視察談を話された。野戦病院に於ける慰問と感謝並びに川柳講演のこと、小川

七十二といふ仰山な賞品を手際よく捌いてしまつた賞品係の面々、里十九親分以下一人も賞品はよう取らず「何んぢやいな。」(豆)

中佐の話、支那臨時政府の機關新聞の記事などから支那民衆のあきれた香氣を加減を話され、又鳩に笛をつけて飛ばしてゐる北京のことから、蒙疆に入つて蒙古人の家庭を訪問したこと、黄河で少便して来たこと、守備兵が、山頂に曠野に、鐵道に、守備してゐる泪ぐましい情景を聴かされると、吾々も今更乍ら、皇軍の有難さが身に沁みるのであつた。

路郎先生の講演が終ると、

紫村半九郎氏の聲帯模寫で瀧口上野の三段笑ひに、一番よろこんだのがかほるさん。

(豆)

大毎紙上で近頃連載漫画で好評を博してゐる蟬尖兵こと小川武君を筆頭に、寺尾トモミ

竹中アキラの漫画家群が、お好みによる川柳並に似顔の揮毫を待ち受けてゐる。柳秀醫學博士や白面人君など席を起つて後方の揮毫席に歩いてゆく。講壇の方を向けば、當大會の餘興である紫村半九郎氏の「聲帯模寫」一人七役で山本有三氏の戯曲「嬰兒殺し」の朗讀である。小山巡査、娘つぎ、屑屋さんの使ひわけか

身体の不自由な葉光氏を背負ふて来た柳笑氏、歸りを出迎ひに来るお母アさん——あゝ美るはうきかな。(豆)

ら、愈々この戯曲の主人公、女土方の杉原あさが登場する。これ。貴様、兒を殺したな。と、とんでもねえ、わし決して、そ、そんな……といふところから始まる巡査とあさの科白の遺りとの巧妙さは、全くもつて同一人の聲とは考へられない。朗讀の興はなか／＼盡きなかつたが、後に控へてゐるのは席題の披露であつた。

席題の選者は有恒川柳會の寺井鋭々氏、松坂クラブの石井白面人氏、蟬響川柳社の河野夜王氏、三越川柳會の小西落丁氏であり、鋭々選の「夫人」白面人選の「支那語」夜王選の「頼母子」落丁選の「飛行機」の順序で逐次発表あり潮花君の記名と、入選者の雅號は明瞭に報道され、名アナ

さんがつまみ出す番號と各自の手に持つてゐる番號と合へば當錢である。斯くて閉會は十時三十分。

ウンサーを思はせた。最後は恒例の抽籤で、當れば諸大家寄贈の揮毫作品を獲得出来るわけだ。社交界の花形で女流川柳家の川出美根子

大會の講演者、選者、委員の記念撮影をもつて終る。當夜は京阪神のオール川柳人をよく集め得たが、名古屋の平田素天氏、奈良の森田輝翠氏、

員委び及者選會大



美鮎・々鋭・子根美・乃霞・郎路・秀柳・王夜・太紋・丁落・雨線 (りよ右てつ向列一)
水吞・江つな・江しよ・人某・客水・葉風・しよ万・樂艸・鐘夕・るほか・トイラ (列二)
花潮・武・秋豆・波一・香紫・童頑・をわい・人面白・蓬孤・人變・鈍亞 (列三) 九十里
氏諸のラキア・むさお・兒青・トーア (列四) ミモト・郎九牛

書け一奇に 全国便箋

集された柳人達のうちで、最も感銘を受けたのは、中年の方で子供のやうに負ふされて入場して来た人である。子規の「病牀六尺」ではないが二

「抽籤係は毎年麗人だ」「その助手に當つた人は」「万よし………か」(豆)

十年來床を離れたことなく、まして、このやうな會合に未だ曾て出席したことのない川柳家、山本葉光氏の名は餘りに知られてゐる。全國の柳誌柳壇のあるところ、華光の名の載らないところなき健吟家の彼が、今宵、始めて、その姿を吾々に見せたのであつた

抽籤に路郎師の色紙を當てた白面人さん「もうあかん思もて、破つてしまつた抽籤券をしらべて見たら、最後の大物が當つてゐました。(豆)

氏の川柳熱心の故か、將又、この大會が川柳人一般の缺く事の出来ない年中行事となつたからかは知らぬ。然し孰れにしても氏の肉體的不幸を忘れしめるものは川柳に生きる尊い姿として吾々には映つたのである。(文責記者)

(五)カタカナで兵隊さんへ手紙かく變人
(五)母からの慰問袋へ生きてゐた時彦
(五)兵隊に子があり支那の子と遊び葉光
(五)兵隊の親も九段で語り合ひ万よし
(五)兵隊を五人出して上座に居貴志子
(五)兵隊となる日は嬉し大和魂いわを
(五)兵隊へ富士美しく日の出する鮎美

「乾 盃」 小川百雷選
(五)乾盃の群れをはなれて軍馬あるとしみ
(五)有難しこの乾盃は僕の爲喜彦
(五)乾盃へビールも酒もあつてよし星花
(五)末席も遅れてならぬ盃を挙げ澄風
(五)乾盃の片手は日本刀を突き鮎美
(五)乾盃は皆日本の方へ向き曉童
(五)乾盃へ覺悟を見せる眼がまとも呑水
(五)乾盃へ勇士の決意ありくと聰夢

「家 賃」 辻井京二選
(五)怠つた家賃に師走の風荒いよし女
(五)バツグンすぎなく家賃置と歸に連城
(五)家賃を取りに行き勇士の家靜か鯨波
(五)新建の家賃すげない返事する二南
(五)滞納へ家主就職口持つて来る九紫
(五)半額の家賃家主へ軍事便神樂
(五)家賃延ばす話へミシン響いて來鋭々
(五)拭き込んだ上り框へ家賃置きいづむ

「土 土」 大島無冠王選
(五)土付けた顔激戦を語り合ひ稔幸
(五)土の匂ひにむせる月明曉童
(五)上陸第一歩土の匂ひに闘志湧く六花
(五)人間を埋める土を掘り返し變人
(五)掘けゆく土皇軍の踏む力輝翠
(五)新しき土新しき手に生る正穂
(五)支那の土掘つて支那兵埋葬て神樂
(五)樞原の我は土の子日本の子一笑

「白 衣」 長崎柳秀選
(五)雄々しくも白衣自活の道をたて光路
(五)ほがらかに話す白衣の松葉杖いわを
(五)うはごとの戦友を呼ぶ白衣なり万よし
(五)母からの便り白衣が讀んでくれはるを
(五)白濱を白衣の勇士歩いてる如雲
(五)輸血して白衣の頬が生きて來る小松園
(五)戦功を稱へば白衣笑ふだけ風華
(五)これでこそ強い白衣の秘す武勳州鳳



談雜の流一僕

(A)

鳥 死 不

市バスとバット

大阪バスが市バスに買収され... 阪急前しか参りません... 天六行があつた筈だが...

と言ふ。

「それででは値上になつたのか」と横から聞いて見た。

「いゝえ、ガソリンの節約です」

「それでも天六まで三區だつたものが四區の勘定になれば値上げぢやないか。阪急から向ふは運轉しませんが云ふのであれば、ガソリンの節約にはなるが、運轉はするが、一區分頂きますと云ふのではガソリンそのものの節約にはならないぢやないか、天六まで運轉したものを、阪急までに路線を短縮したとすれば値上げと云はれても仕方があるまい」

女車掌はだまつて終つた。

バットの銀紙がなくなつたり

函が小さくなつたりした時に、銀紙や、函の紙の節約だと聞かされた。それでバットの値段が相變らず八錢だから私はバットの値上げだと思つた。銀紙や、函の紙を喫ふ譯ではないから、別に差し支へないやうなもの、おかしな節約だと思つた。

節約と云ふ言葉は、自分の消費をつましくする事だと思つてゐたら、人の享有する權利をつましくさせるのにも用ひる言葉だとは近頃此の二つの例で知る事が出来た。

ナニワホテル

和田默然人 北京前門裡小四眼井胡同甲四〇號

前の例は合併の弊害が高壓的に表はれたもの、バス代を拂はぬお役人の商賣にはありがちな事かも知れぬが、釋瀛齋ならねど、詳しくは考ふべしである。

後の例に於ても同じ様なこと

忠臣藏寸感

が言へる。バットの小さい函には別にパイプを付けてくれるが汚らしい手で驚嘆みにされたの、銀紙はないが大きな函の時には、三個づゝ求める私も、小さな函の時には一個か、二個しか買はない。それで皮肉な事には私の方がホントの節約になる。これでは専賣局の賣り上げに影響を來たしはしないか。とは言ふものの、私も事變下の物資愛護の精神は持つてゐるので、少しばかりの紙を節約して小さな函にするよりは、バットに限り函を廢して、いつそ、紙袋にするか、も一つ進んで、バラ賣りにしたらどうかと思ふ。そしてケースやパイプは自辨にさせたらどんなものだらう。

山本葉光

へても好い事である。まだその段は新鮮なレビューが歌舞伎の「忠臣藏」を原本としてゐる事は嬉しい。老人は大星を知り過ぎて、大石も知つてゐる。若人は大石を知つてゐて、大星などは知つてゐても馬鹿にしてゐるがために知らない。

現在に於て日本人の大家はあまりにも外國の事を善惡共に知り過ぎて、東亞の隣邦の支那の事はあまりに知らず、かつまた日本特有の善惡さを知らなすぎる様に思へる。

あたかもそれは、青年自身が年齢のより考へて明治時代以前の青年が傳れてゐて、愛人でも母よりは頼りない氣味であるかの様に思ふ爲めかも知れないが映画で觀る「忠臣藏」はほんのちいさい實説と、浪曲、講談にある嘘を大半混せて、これまたすこしの主感の勝つた安っぽい映画が多い。これも大衆的を目的としてのためではあるが、考

電熱製菓實演即賣

- 三共 イースト・カステーラ (廿錠入) 一本廿錢 兩付
マルキ イースト・ウェハース (十四錠入) 十四枚 廿錢
マルキ イースト・メロン 百枚 七十錢
一茶 もなか 一個貳錢廿個入
一茶 せんべい 百枚 五十錢
三共 イースト・シャンパン 百枚 七十錢
シャンパン・ビスケット(ジャム入) 百枚 六十錢
浪花 カステーラ 百枚 五十錢
◆本みやぎ喫茶部 コーヒー・紅茶・こぶ茶菓子付
十錢・茶菓子・ケーキ各五錢

所張出社星三 橋店ツ電市

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入 電話 南五 六二 番

り、歌舞伎、淨瑠璃の古曲的精神を知る事は「忠臣藏」ばかりではなく「太閤記」でも、實に

楽しいものである。吉川英治氏の「宮本武藏」はこうした精神の素々新しい見方をしてゐるのではないだらうか。BKのアナウンサーが郷土藝術たる義太夫の題名を最近も「お駒子」の三をソウと讀んでゐた。佐久間象山をゾウ山かどうかと同じ様な論はしたくないが、十二月が来る度に思ふ寸感である。

川柳書架(七三)

句集 夢

▼本書は十四字詩で埋めつくされてゐる。その序文の一節に、「習作途上にある僕は手段と

大阪道頓堀

天牛本店 電話 南二七四八・二七四九番 振替 大阪 五六一五〇番

して偶々この手を用ひる丈でこれ僕が十四字至上主義者と思はれる事は悲しい(曉童)

民俗學で知られた醫學博士澤田四郎作氏の續飛彈探訪日記が出た。後記に「私も近いうちに軍醫候補員志願兵として入營する事になつてゐるので、この雜筆も暫くの間は書けないかも知れないが、次回は支那大陸從軍記といふ大きな雜筆をお目にかける事が出来そうである。」とある。菊半截一六四頁、非賣品。發行兼編輯者は大阪市西成區玉出本通一丁目十二澤田四郎作氏。

いつそちぎろうかシヤツのぶらぶら卸

鶴觀堂

艸樂 靜觀堂とは、先頃路郎主幹が北支豪傑旅行中に會はれた軍醫大佐(？)とかである。初めて川柳を作つて送つて來られた數句が近作欄のトップを飾る出來ばである。

此の句は破調であるし、もつと引締める事も出来るが、句意と共に軍人らしい、小事に拘泥せぬ氣風と、現地の様子が窺はれる愉快な句である。

山雨樓 投句は初めてかも知ら

(評句)



山雨樓氏

前號 近作柳樽 から

福山田雨樓・西田艸樂



艸樂氏

使はれる。

ぬがどうして仲々、凡手ではない。斯ふ云ふ日常茶飯事を句にするになれば占めたものである輕い卒直な氣分がよく出てゐるがそれだけ持味が淡く單調だと云ふ見方もある。破調は出来るだけ慎むべきだと云ふ苦言を呈する。

若氣の至りを金にする肚

芳泉

艸樂 動産か不動産か、兎角所有物を金に積つて見たいのが人情である。若氣の至りはいつそ、金にしてすふ肚、老人達の

危ぶむ事。

山雨樓 この句の中から「を」を取つた方が十四字詩となつていゝやうであるが、この「を」が句に複雑性を持たず事に役立つてゐるのも見逃せない。僕は寧ろこの句の前の「蜜の夫婦」か面白いと思つた。

月明り寺のかはらのそりかへり

緑水

艸樂 いゝ敘景である。

かはらは屋根である。薨などがあてはまるだらう。が、かういふ言葉は川柳の默契としてよく

が湛えられてゐる。「實のる」は「稔る」がよい。

艸樂 兄も馬も征きたる後に農繁期が迫る。だから寧ろ「秋實る」に重點が置かれていゝ句であるが、「秋實る」はあまりに美文的で切實さは薄らいだ感がある。

頼母子を落し損ねた初鰯

翠峯

山雨樓 龍田から法隆寺へかけて古典味のにじんだ田園風景をしのぶことによつて、この句の美しさと、もの淋しい感觸とが

迫ってくる。

艸樂 短歌や俳句知の人々にもこんな川柳の正當な味を理解してほしく思ふ。

淋しき葉あれが火になる日を想ふ

アキラ

山雨樓 先日アキラ君と二人きりで話した時、その深い情感を好ましく思つた。果然斯うした内面的に掘り下げた詩美豊かな句を見せてくれた。

艸樂 その幻想があるので青年の一日は貴い。

ワタウシカ年筆



書きよくて
堅牢！
純國産の
優良品



ムツツリーニペン發賣元
大阪 株式 澤井商店

勅題 旭光のこゝぞと照らす大八洲

日頃の御聲援を感謝します。
聖戰に第三年を迎へ、東亞の天地には八統一字の新秩序建設の行進譜が吹奏せられて居ります。千古未曾有の聖業を翼賛し奉るじがたり政治に、經濟に、産業に、文化に、一億一心の職場を堅持せねばなりません。

御援助の許に大阪市會の第十一年都民新聞の第八

幸と迎へて、両者を通じて微力を君國に盡さん熱意に燃へて居ります。謹んで高堂の萬福を祈り此の鞭撻と願ひます。

昭和十四年九月一日 大阪都民新聞 主幹 大阪市會議員 庄健一

皇紀二千五百九十九年躍進日本・大陸發展の輝かしき新春を迎へ謹みて 聖壽の萬歳を壽ぎ奉り併せて川柳家各位の御清福と倍舊の御交誼奉祈上候

巳卯 元旦

麻生路郎 乃



詩人複眼 (9)

高鷺 亞 鈍

臍と横綱

臍の無い蛙の腹をみて、つくづく間延びた感じを抱くといふ人間の心理は、人間の腹に臍の無い場合のことを想像するからに外ならない。しかし蛙の腹になつてみて人間の腹を考へたら如何に腹の中央の臍が醜態であり、見つともなくて而も不潔であるかが想像される。人間はさういつた臍を持つてゐる癖みからして、蛙のあの、すべ／＼した圓みをもつた淡白色の無疵な腹の美しさに目が止まらないんだ。幸ひ吾々は日常に於て、蛙の如く裸でゐないで居られること

ルビサア

大日本酒株式會社

常に残念に思つた。全く人間の腹といふ腹の中で玉錦のやうな布袋腹の力士型の腹ほど蛙に似た美しい腹はない。しかし人間つて、あの臍の穴に装填する可く、ダイヤモンドか、サングの玉か、ルビーか、高價な寶石を贈つたら、あの豪華な日本一の土俵人も一層惹きたちはしなかつたかしらと僕は思ふ。兎に角裸腹世をするお相撲さんはラムネ玉でも可いから腹の上に載せて、臍を隠すがよろしい。あれでは全く人間の腹汚しであるからだ。

髭の心理

人間の心理といふものは奇妙なものだ。例へば髭は威厳を感じ、恐怖を覚え、信頼の念を起さしめるのである。髭みたいなものは泥鰌でも生やしてゐるぢやないかと反撥したくなるが、それでも無髭の男は髭のまへでは何か、あとすざりしたくなつてくるのは、どうしやもない。

一體、髭男が髭を貯へる動機は別に、これで人を恐はがらせる。浮世と別に鮮人の髭 曉童

柳人素描

(三五) 中島紫痴郎君



信州と聞いただけでも詩情は動く。その信州の湯田中温泉で醫者を業としてゐる紫痴郎(しちろう)中島熊吉君は明治四十年頃川柳に手を染めた日本柳界に於いても古顔の一人だ。明治末期に東京から森井荷十君が出してゐた「矢車」の同人として鳴らしてゐたが信州へ移つて醫を業とするやうになつて全く鳴りを沈めてゐたが昭和八年頃から柳風會を主宰し機關柳誌「湯の村」の巻

柳界展望

催

全國川柳界の各地川柳人の一舉手一投足を此展望欄ですぐわかる様にした。皆様の御通信を歓迎する。(係)

▲松山市大角堂電停前、佛教會館に於いて戦後柳友慰靈會、柳大會が來る一月二十一日(日)に開催されることになった。大南柳井町五九矢野

幹出席。▲尼ヶ崎住友會は十二月十日住友金屬鋼管製造所俱樂部にて開催した。路郎主幹、霞乃女史出席。▲松坂俱樂部路郎川柳講座、阪大川柳會の人々によつて十二月四日阪急あしや川六麓莊谷戸氏別邸如水集に於て補公追慕川柳會を開催した。路郎主幹出席。▲きりん吟社(新卒)では忘年會を十二月十八日に開催した。▲川柳雜誌社下關支部(關)では師走例會を十二月十二日に開催した。▲川柳雜誌社今治支部では師走句會を十二月十日に開催した。

消息

▲西田柳樂君(大阪)より「けふはワイフに工場を見分をしてしまひました。笠置山温泉にて」の圓滿なるお仲の繪はがきを頂いた。▲大坂形水君(大阪府)は十二月中旬息女立子さんをもうけられた。お慶び申上げる。

轉居
▲鳥生古弗君は吳市警固屋町十一丁目渡部朝吉方へ。
▲西田當百君は西宮北口市場東横へ。

改號

▲小島大口坊君は鰯洞。

正誤

▲師走川柳大會席題小西落丁選飛行機地位の句「飛行機で来て少々はうそのべ」は飯尾寄與史君の作につき訂正。
▲第六卷第二號募集吟後藤青兒

器紙・刷印るゆらあ

所刷印堂英日井永

所張出 場工分 店本
(筋堺)町本南 町勞博 堀佐土阪大

社告

▲一月から左記の支部開設、幹事は岩崎柳君。蒙讓支部(張家口)左記二支部を廢止する。
田邊支部(大坂市)御旅支部(大阪府)に推薦。
▲一月から不朽會員に推薦。
岡野本 水君
田某 人君
左記の兩君を不朽會員名簿より抜く。
近江 藤 勇君

頭へ毎號不偏の太文字を草して信州に紫痴郎ありの馳名を馳せてゐる。君の句には

何になる何にやうと子等を見る
老妻に化粧をすゝめ笑ひ合ふ
の如き静かな生活描寫から

こんな川の水でも海へ行くのだけ
起重機はだまつて仕事して居るよ
の如き深さをもちた句に生きてゐる。

紫痴郎の號は野暮な男といふ意味だそうだが、野暮と背中合せの君子である。趣味としては書畫、骨董、名譽職は辭してうけない。おそらく川柳人協會名譽會員が唯一だ。別號は弓之助、愛樂明王、六極庵。

君は明治十五年五月二十四日新潟縣南魚沼郡大崎村に生れた。現住は長野縣下高井郡平穩村。三男二女の子福者である。

(三六) 勝山とし君



勝山とし君は小松中學の國語の先生で、別號はないが、生徒から「坊ちゃん」と綽名をデケキートされてゐる頗る變り種の子である。天にも地にもただ一人であること

宿屋生活をされてゐること、小さい時から本名齊(ひとし)を、しとしと讀み誤つてゐたので、俺は人世も誤讀してゐるやうだから、川柳の號も「しとし」にしておこうといふ飄逸さ等々がニツクネーム「坊ちゃん」の素因を作つたのかも知れない。

君が川柳に手を染めたのは大正の終り頃だそうだが昭和四年にはじめて「川柳雜誌」に投句して今日に及んだのであるその作風には

起きよとも寝よとも誰もいひもせず意地悪であつたと弔辭書いてなし名論をはくに忙し咽喉佛の如く人世を白眼視してゐる君の境涯を卒直に描出してゐる佳吟が眼につく。

君は明治三十年七月二十八日福井縣宮崎村小曾原に呱呱の聲をあげたが現在石川縣小松町の宿屋住ひだ。趣味は登山川柳人協會正會員。



協・川

須崎豆秋君(評議員)の令弟三汀君が「日本を今ぞ見なほす春になり」の句を作つて、高松高商教授揚半山氏に譯詩を懇請されたところ、早速次の譯詩が出来たそう。

揚半山

本是同文同種 自當日見日親
請看東邦人士 笑容滿面如春

と。川柳を通じての日支親善だとは云ひながら、三汀氏妙からず恐縮したそう。敬すべきかな半山氏の寛容。揚半山氏は會て柳人素拙で紹介された川柳會員楊柳夢氏のことである。同氏の面目が躍如としてゐて近頃愉快な話だ。

右の大會により本協會から大阪朝日新聞社會事業團への寄附は九拾四圓五拾錢也で前年に比し三拾一圓五拾錢増の好成绩であつた。なほ大會費用中への御寄附は當夜會場に出しましたことが、費用の詳細は幹事から



品質本位
上田の唐水
北區鳴尾町重信鳥居東下
電話 堀川 五一七〇

した。御諒承ありたい。川柳人協會主催、大阪朝日新聞社會事業團後援の同柳人の白熱の聲は京阪神川盛會であつた。(別稿記事及寫眞參照)去年よりは本年より來年といふ

御報告申上げることになつてゐるが幹事が年末多忙のため多少遅延をまねがれぬと思ひますので御寛容を願つておく。同情週間川柳大會の句の發表は紙面の都合で三才五客に限つた。他は次號に譲

謹告

一金地二曲屏風 一點

右は全國川柳有志諸氏より、不肖久良伎古稀記念品として貴會を通じて御寄贈相成り、御芳志の段々深く感銘を申し候、一々感謝差上げべき筈に候も、老病動脈硬化症にて双脚麻痺勝に起居不十分爲に靜養中略儀乍ら此弘告を以つて貴會を通じて御挨拶に代へ申候
昭和十三年十二月十八日
市川市新田百五 阪井久良伎

川柳人協會理事長
麻生路郎殿

盛大に舉行されることは斯界のためにまことによろこばしい。御來會の川柳家各位、並びに講演者、選者、大會委員、餘興出演者各位へあつて御禮を申上げる。

賀正 川柳人協會



パーマメント
ナショナル
山口倫子 經營・電南992

大阪・心齋橋筋周防町角

B.7圓 A.10圓

- ・シャンブー
- ・セツト
- ・附屬共

フー・フー・フー

洋装の
第一線
に立つ



ドレスツクリ
ブルブー

南區心齋橋一丁目四番
電話 南 2719

地柳壇

規清稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

理整秋豆・郎路

川 鶴町支部句會 (大阪)

十二月十日 於 上山よしみ居
加藤ライト報

客、青年、廢物、鏡、產婆

隅に座す客は時間を氣にして居
氣安さの客で家賃を聞いてゐる
子供等をみんな追ひ出す客が来る
露路に来る客は都會の人らしい
青年の意氣を見せてる辯論會
赤い灯がフット青年を迷はせる
廢物の利用子供におしへられ
親切な產婆寄り道してくれる
產婆さん足の速さを喜ばれ
男でせうかと產婆へ聞いて見る
やすくと産ませ產婆は足袋をはき
奥の間へ產婆早速駆け上り

川 北大阪、港兩支部合同 六甲山吟行の會 (大阪)

十一月三日 黒川紫香報

登山、眺め、くしやみ、水筒、
ハイキング雜景、鐘

登山靴重たく酒場の灯へ這入り
登山するリニツクグリコも入つて居
八合目湖水が見えて飯にする
登山靴妻は重そうに磨いてる
後ばかり眺めて先頭又登り

川 港支部句會 (大阪)

十一月廿六日 丸尾潮花居

初雪、焚火、銃後、道草、
バスガール、許婚、漫畫、雜

い、眺めトタンに腹が減つて来る
癖のあるくしやみにどつと笑はせる
水筒もそろひ兄弟、元氣なり
忠實に勤めて鍵をまかされる
首に鍵かけて汐湯を泳いでる
水害の後生々しい谷ずたひ

川 北大阪支部句會 (大阪)

肩、花火、鏡、雜吟 黒川紫香報

もみにくい姑の肩に骨があり 一笑

川 大鐵局支部句會 (大阪)

於 大鐵俱樂部
正本水客報

空瓶、三味線、財布、立話、國策、漆物、
奈良、電線、傳説、炭酸紙、天窓、
食堂車、切符、家賃、ボート、歸
り路、急停車、氣兼ね、募集、雜吟

い、肩を質めて按摩は金を取り
前列の肩に尺取虫が這ひ
二つ三つ震をためた肩で来る
ハンドバックバス待つ肩を叩かれる
手鏡で白髪のあるをふと見つけ
大部屋の鏡表は雨となり
だんくんと母に似てくる鏡を見
打花火街の祝へ落ちて来る
寶塚花火の音に山が見え
心配が消えた月夜へ句が浮び
辨當を案山子の腕へかけたまゝ
見る度に案山子の顔に笑はされ
文を書く庭に秋の虫が鳴き

初雪はあつさり止んでしまふなり
初雪へ衿がきれいな蛇の目傘
初雪の海は静かなまゝ暮れる
普請場の焚火親分が来て煙り
ルンペン焚火へ刑事話しかけ
とんどの火密柑の皮を捨てゝ寄り
とんどの火ゆふべの禮を云ふてゐる
道草をする氣ネクタイ變へて出る
泣き顔をかくし水屋の前へ立ち
蒸したオル、チップのたかを考へる
バスガール終點近き欠伸をし
バスガール千日前の灯を眺め

川 塗青支部句會 (大阪)

十二月十日 於 染料會館
淺謙公報

彈丸、遅刻、煤拂、毛布、首巻

子供みなそれく切符持たがり
東京の廣さ乗替券を見る
案外に安い家賃はこはがられ
家賃丈別の袋に入れて置き
いゝ借家兎も角家賃聞いて見る
ボーナス迄と借金亦つくり
ボーナスを貰ふに釘掛けて行き
お隣の犬と驛から歸つて来
つく嘘がもうきめてある歸り道
運ちゃん背越しに何やと急停車
急停車村の子供が走つて来
母の背へかくれ一銭欲しい聲
十七八の美人が欲しい募集ビラ
日の丸を持てば泣き止む男の子
感情をおさへて話す錢のこと
應召の子へ母馴れぬベンを持ち

彈丸、遅刻、煤拂、毛布、首巻
言譯に顔が赤なる遅刻する
優等生片手に遅刻せぬほうび
大袈裟に言ふて遅刻は入つて来
遅刻して君が代半分文け歌ひ
煤拂ひ今日は亭主が叱られる
此毛布スフだと聞いて寒うなり
苦學生毛のない毛布へもぐり込み
ハーマニカ首巻軽く肩へかけ
今朝着いた首巻母のあたゝかさ
停年の頸巻とれば首細し

川 今治支部句會 (今治)

日記、帳尻、建設、關、漢口
詰襟、秋、豊作、角力

明日の風が吹くよと日記書き終り
初戀のそれから日記面白し
陥落へ二重丸あり日記帳
妻の日記の子の事に盡き
帳尻が合はず作を呼びつける
帳尻へ利子といさゝか書いて呉れ

丹
路
報

同 同 路 豆 丹 亞 潮 丹 豆 潮 豆 同 入 豆 同 神 同 形 潮 葭 亞 形 路 同 葭 潮 亞 潮 路 豆 神 豆 豆 丹 葭 神 同 同 潮 形
郎 秋 路 鈍 花 路 秋 花 秋 仙 秋 樂 水 花 乃 鈍 水 郎 乃 花 鈍 花 郎 秋 樂 秋 秋 路 乃 樂 花 水

菰 菰 鮎 艸 同 豆 同 菰 か 艸 豆 路 豆 鮎 同 路 か 菰 豆 艸 菰 同 同 路 艸 豆 鮎 丹 神 同 路 豆 同 菰 豆 鮎 豆 か
乃 乃 美 樂 秋 乃 乃 樂 秋 郎 秋 美 郎 乃 秋 樂 乃 郎 樂 秋 美 路 樂 郎 秋 乃 秋 美 秋
報

同 同 同

路 鏡
郎 々

波夢造 同 三 笑 朴堂 同 乃武路 同 三 笑 しげる 同 朴一 堂 同 波夢造 同 平 三 同 同 同 同 銳々

21

デパートで夫の財布覗き込む
あつらえた様に間に合ふ百貨店
デパートで藝者素顔を見付けられ
百貨店只でもらへる様に行き
デパートも出来たと國の母は書き
出来心までさそひ込む百貨店
デパートで娘嬉しく買はぬなり
デパートにソワ／＼として國訛り
抑制をよそに美術部御繁昌
この日和せめて百貨店に行こ
百貨店商店法ににやりとし
百貨店お好み食堂も御座のます

22

包袋

女客どう御禮を言ふで去に 女客ござますくで日が暮れる	同利生	柳秀
女客上るに中々手間がとれ シトロンも用意されてる女客	同利生	方正
女客今日は歌舞伎へ行く蕭物 手土産を先に渡した女客	同利生	方正
隣室で聞きや女客僕と云ふ 女客だまつて社長室へ通り	同利生	方正
女客歸ると女房何にか云ひ 女客歸りに氣付く鳩時計	同利生	方正
女客椅子へ三分がほどもかけ 買ふた値もうちあけてゐる女客	同利生	方正
氣まぐれへ従卒はたゞかしこまり 氣まぐれに和して女中は逐ひ出され	同利生	方正
何が氣まぐれだ子までなした仲 氣まぐれのお出かけ夫はにがりきり	同利生	方正
氣まぐれな男社長の氣に入られ 氣まぐれ決めておしやくは取り合はず	同利生	方正
氣まぐれの言葉の端に思ひ寄せ 氣まぐれを一寸にらんだいゝ姿	同利生	方正
そんな氣まぐれ云々かん女將の眼 氣まぐれの丸髻結つて淋しがり	同利生	方正
氣まぐれが釘づかまでも香具師の口 奴だこ氣まぐれと言ふ上りやう	同利生	方正
氣まぐれの一夜の契り長恨歌 氣まぐれな男の好きな懷ろ手	同利生	方正
氣まぐれに買った玩具へ叱られる 氣まぐれの娘今度は繪を稽ひ	同利生	方正
氣まぐれですといへど仲々自信あり 氣まぐれな男心を妓しり	同利生	方正
氣まぐれにつまんだ嫁に押へられ	同利生	方正

C—27





一路集

募集句

羽子板 東魚選

羽子板も去年のまゝで銃後なり
 羽子板を突く娘の袖が長すぎる
 羽子板を買つてもう娘のお正月
 羽子板にふれず少女は病みつゞけ
 羽子板をもつて女の子は寫り

羽子板へ叩かれさうに屠蘇機嫌
 大陸へ羽子板が出る明朗さ
 羽子の娘のどの曲線も美しい
 羽子板の押繪昔の世を偲び
 樂隊へ羽子板ボンとはつて駈け
 羽子板が貰つて貰へた綴り方
 羽子板にタンクも描いてある銃後
 戦捷の春羽子板の軽い音
 羽子を追ふ少女に春の日がまとも
 羽子板の値札が變る大晦日
 羽子板を持つてカメラに立つ若さ
 羽子板の鈴も正月らしく鳴り

緑水 羽子板は矢張り日本娘なり
 華光 羽子板へ女房少うし若がへり
 不水 羽子板をかゝえただけの女の子
 香月 羽子板へ長い袂が重たそう
 曉明 羽子板へ今日元旦の風が吹き
 春集 きゝ分けてやつと羽子板屋を抜り
 孤蓬 羽子板の土産の母はついて見せ
 みづほ 羽子板へ安心さうな兒の寝顔
 同 一人だけ土蔵の横で羽根をつき
 房子 戦勝の春へ張切る羽根の音
 同 追羽根へあるかなきかの風もよし
 葉留路 羽子板の夢も覺めない女店員

同 駈け出たい思ひ羽子板ちつと抱き
 柳太 羽子板に榮華をみせる妓等の春
 同 羽子板を抱いても淋し片育ち
 没志 羽子板に乙女心の躍るなり
 同 振袖の娘に羽子板の大きすぎ
 芳泉 自慢する丈けの羽子板床へ置き
 同 病む子とは知らず羽子板届けて來
 同 羽子板を踏んで妹に泣き出され
 風葉 羽子板の音お屋敷は静かすぎ
 同 羽子板へ女中二人は留守を居る
 鏡水 羽子板を飾り女將の十二月
 同 羽子板と娘へ初春のカメラ向け

同 同
 曉童 同
 比呂志 同
 明子 同
 水客 同
 同 同
 斗風 同

森 東 魚

豊中市櫻塚一一〇四

高橋 かほる

大阪市南區北炭屋町六番地
電話 五九六番

池田 可宵

仁川府宮町

森 立 名

大阪府吹田町字萬畑一四二六
電話吹田二二八番

小西 落丁

布施市永和三丁目三四

長崎 柳 秀

阪神沿線御影町字榎本

中西 おさむ

大阪市東成區北生野町一ノ六

中澤 濁水

高知市興力町

石崎 柳 石

今治市城山通

須崎 豆秋

住吉區旭町三丁目一四

前田 五健

松山市眞砂町

橋本 緑雨

大阪市住吉區平野西之町三
電話天王寺一六七番
振替大阪二九四五九番

永田 里十九

大阪市南區疊屋町六
電話南七五五一番

中見 光路

大阪市西成區
粉濱西之町三ノ三

福田 鶴峰

大阪市住吉區平野西之町七

富士野 鞍馬

東京市麴町區一番町四ノ三

藤本 蘭華

京都市姉小路鉄屋町角

姫田 夕鐘

大阪市大正區小林町三六

櫻井 圓角

大阪市東區兩替町松屋町
電話東五三一二番

石田 沐天

[illegible]

飛・燕
往・來

▼石原青龍刀
君(北京)遙啓
愈御精進賀し
上げます。舊
前柳路君を通
じて高著「新川柳評釋」拜領、
拙句御採録の事を知り望外の喜
悦を覚えました。高著の不偏的
な採録振りに敬意を表します。
遷生十月より北京に轉動、事變
後の變化に若干そぐはぬものを
感じながらも傳統の都北京のよ
さを漸次に探り得ようと念じて
ゐます。默然人老も北京人にな
ります。

つたと申し居られ、小生等の主
唱で各派合同北京川柳會も出来
ました。ボツ／＼盛んになるで
しょう。

▼岩崎柳路君(張家口)小川部隊
長と先生のお暇をして飲んでゐ
ます。松代が歸阪してゐますの
でその後御無禮いたしてゐます
何れ後便にて。

▼小川中佐(張家口)今日は日曜
日です。柳路先生と當地の俳人
清水先生と三人で酒をのみなが
ら(と申しては失禮ですが……)御
暇をしてゐます。雜誌受取り

ました。

▼池上清水君(張家口)風がない
と日ざしが小春めいてあたゝか
です。こんなに内地と離れて句
に親しめるのは全くありがた
いことです。

▼宮尾しげき君(東京)程頤秋の
芝居をこらんの由、うらやまし
いです。程だけ見のこしてしま
ひました。やつてなかつたので
……。

▼蛭子省二君(光州)病頭の机に
雜誌やら單行本が殖える許りだ
から少し氣分のよい時は馬力を

かけて讀む。その疲勞もあるの
か氣温も下がり数日前から又々
逆轉。六種服藥。藥を服むに迫
はれる。貴印象記は著誌と同時
によむ寫眞入り故よく判る。到
底支那などに渡れぬ私には絶好
の讀み物、智識を得る。支那關
係の書物は、かなり関しつゝあ
り。伎翁贈品はお手数なり。評
釋好賣行きの由結構。歳末歲始
は多忙なのが世間並、折角御健
康にて御活躍を祈る。私は寢て
暮す。喪中故萬般缺禮。

▼塚越正光君(東京)「川柳雜誌」
十二月號拜受御禮申上げます。
張錦記の記念品
大原市東區谷町二丁目五十八番地
電話二二五八

▼酒井大樓君(松山)只今伊豫新
川柳新年號選に掛つて居ります
仕事と川柳とは兩立しませんの
で困ります。

只今荷物輸送戰線の渦中に巻き
込まれて居りますので川柳も皆
荷物に關したる事のみが生れま
す。殺風景で恐入りますが悪し
からず願上げます。

▼宮岡白峰君(〇〇)當地は西田
紳樂さんに來てもらつて草に名
を附けてほしい様な植物が澤山
あります。しかし雨は降りませ
んが……一度熱帯植物研究にお

川柳雜誌社松山支部

酒井大樓

松山市松前町二丁目三九番地

川柳雜誌社下關支部

多田市多樓

聖戰の予を初日にかざすなり

吉田水車

名古屋市中種區田代町堀割大
川柳雜誌社名古屋支部

快速度川柳社

潮田明坊

姫路市船橋町二丁目六〇

川柳雜誌社西條支部

荒井英賀夫

愛媛縣西條町本通

川柳翻譯研究會

東京市小石川區初音町四

高須啞三昧

大連市伏見町七七

西島丸

東京市四谷寺町六

大鐵局

畔柳社

正本水客

大阪三越川柳會

天守閣

米澤曉明

愛媛縣喜多郡大洲町常盤町

山田南濃路

飯尾寄與史

阪大川柳會

大阪帝國大學醫學部内

出掛けになりませんかとお話し下さい。相當ありますよ。この前、百五十里程の行軍を二本のテクシーでやりました。自分等の隊は連戦連勝でその活躍振りには新聞にも出てゐましたし大毎ニュースにも載った顔が出てゐます。

に文に忙い思ひをしてゐます。▼小寺鴻南君(兵庫縣)今年もお終ひさぞお忙しいことゝ存じます。さて日頃の御厚意に甘へ「川柳雑誌」より句をサンデー毎手へ拜借させて頂きました。勝手新年號に載ることゝ思ひます。いづれ拜肩の上。萬々。

十二月二十二日 美知夫
▼山本葉光君(大阪)とうとう大會に出席出来まして皆々様の御厚情を受けまして嬉しう御座いました。數々の御講話を親しく拜聴も出来、皆々様の御選句による作句による句會の賑やかな楽しさなどつぎからつぎへと想ひ出にふけてゐます。自動車ゆききでしたが、思

はず知らずに過ぎた時間がさすがに脚や腕が疲れて身が入つた痛さです。歸へつたら十一時でした。記念のために漫画の句を書いた。



るます、北支蒙疆の大旅行から無事凱旋大慶に存じます、雑誌紀行は一氣に拜讀しました。知らぬ人の記事よりもやはり知友の筆になるものは、それだけ親し味を感じさゝれます。拜見の今度の旅を何んとはなく碧氏の一日一信の旅と思ひ比べられ、彼は日本を廻るに大旅行であつたのに、時代と國運は此處迄進展したかと今更の如く感嘆致しました。三日の會には是非出席したかつたのですが小生近來健康が餘りよくないので遂に華やか

ろしく御傳聲を。▼福岡葉留路君(廣島)謹啓其の後御無沙汰致して居ります。年末御多忙の處益々御活躍の事と推察して居ります、小生も二十九日よりの休暇を利用して伯耆大山へ長男(八才)を連れてスキ一に出かけ本日歸つて來ました子供ながらも非常時を認識してゐます。上り三里下り一里半吹雪の中を前線勇士の苦勞を味つて來ました、十二月號近作柳樟に投句の分が全没になつてゐるので一寸沈みましたが最下段に三句失名として抜けてゐたので嬉しく思つて居ります。草々

山本雨迷

大阪市東淀川區中津濱通一丁目一〇二
大阪府下濱寺町諏訪之森本通八五
電話濱寺二一九六番

高澤一浪

布哇オアフ島ワヒアワ
郵 函 三 三

漫談報國

青屋伸

御用命は川柳雜誌社氣附

中原銃人

大阪市西區奧美町
樋口商店方

一般印刷
高級印刷
和洋諸帳簿

中川三陽堂印刷所

奈良市北向町二二番地
電話奈良一六一七番

新春のお姿を

わがアトリエで

工藤清寫真館

大阪市西區土佐堀船町
電話土佐堀五五五〇番

所版製眞寫立足

大阪市天王寺區人形町五七番
電話天王寺五九三番

佐々木三福

大連市臥龍台三六

戸倉普天

兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ莊

菊川泰平樂

滿洲安奉線鳳凰城

米本貴志子

岩崎柳路
岩崎松代

蒙疆張家口東安大街
電話二三一七・二三一八
カフェー・オペラ

川柳誌
柳社

今治市寺町一三九

在○月○原宵明

今治市東門通り二一

石手向上一庵

今治市大字石井四四五

平尾清重

今治市南大門通

田窪石鉄

今治市寺町一三九

渡邊曉童

今治市神明町四九

青野悦太樓

今治市外富田村上徳

酣風子改メ

田淺小波

今治市米屋町伊予貯蓄銀行内

谷心府

今治市神明町一〇〇

長野文庫

時節柄これを以つて賀狀に相代へ申候

川柳誌
柳社

鶴町支部

岩橋双虎

加藤ライト

米谷松太樓

高橋房子

上山よしみ

松下小柳子

山岡鉄水

宮岡白峯

宮岡公子

鳥山一步

西宮市外甲風園第三號地七五

福田山雨樓

横濱市保土ケ谷區
保土ケ谷町三三三

西田艸樂

大阪市東區元伊勢町昭和園
經營 日の出化學研究所

奥村丹路

草薙川柳社

丹羽のぼる

名古屋市中川區八熊町寺田一一五〇

昨年八月から私の
勤務地が新京にな
りました、自宅は
やはり大連で時々
歸ります。
音信はどちらでも
結構です。

新京八島通三一ミクニホテル滞在

大島濤明

大連市西公園町
一四九川柳居平洞

湯の村發行所柳風會

信州湯田中溫泉

正木琴舟

支那青島曹縣路

大坂形水

大阪府高師濱

三嶋美笑

朝鮮清津府錦町二三六

川柳雜誌社
廣島支部

みさと吟社

幹事 濱田久米雄
廣島市仁保町青崎一〇八

川柳雜誌社

塗青支部

川柳雜誌社港支部

丸尾潮花

川柳あざみ會

久松明子

川柳雜誌社

天王寺支部

富岡 巨 人
和久 雙 葉
中富 南 鳥
山川 富 士
澤田 粒 子
妹尾 變 人
石川 九 久

川柳雜誌社

御池橋支部

村松夢裡

大阪市住吉區住吉町一七二七

後藤青兒

大阪市東成區生野ヶ丘

西 いわを

大阪市東成區南生野町二ノ六二

川柳雜誌社

梅田支部

酒井斗風

松枝靜峰

山下一秀

天波夕人居

仙見一男

皆邊由布

田元翠陽

水谷鮎美

松坂俱樂部

川柳講座有志

石井白面人

戸田孤篷

川出美根子

中島生々庵

上田耕二

上田尙志

野邊とを

清水三華

有恒川柳會

(順 音 十 五)

加藤武泉	金田木朱	上田朴堂	小川行三	小原三笑	岡本波浪	稻岡徳二
------	------	------	------	------	------	------

寺井鋭々	辻信郎	田中雨月	立川跳二	清水米郎	澤井乃武路	國方錦浦
------	-----	------	------	------	-------	------

牧野釋迦榮	松橋三樂	藤岡 ちける	平佐平三	橋本波夢造	長松兆山	高瀬志可
-------	------	--------	------	-------	------	------

（順はろい）々人の係關社正賀

主幹 藤村 長崎 田中 嘉納 笠原 岡田 大谷 池澤 藤村 長崎 田中 嘉納 笠原 岡田 大谷 池澤

客員 田村 米川 川村 龜井 小島 大谷 大島 沖野 鳥山 末弘 淺田 額本 藤村 米川 川村 龜井 小島 大谷 大島 沖野 鳥山 末弘 淺田 額本

高橋 森小 藤姪 篠原 柴前 安窪 高生 谷協 高橋 森小 藤姪 篠原 柴前 安窪 高生 谷協

春須 大妹 吉市 村姫 水北 岩奥 永西 福田 春須 大妹 吉市 村姫 水北 岩奥 永西 福田

岡野 岩大 丸黒 正鳥 加原 中石 宮西 松岡 岡野 岩大 丸黒 正鳥 加原 中石 宮西 松岡

事幹と部支

道頓堀支部（大阪市） 庄萬よし 九三會支部（大阪市） 北山 悟郎 函館支部（函館市） 龜井 辰修

西條支部（愛媛縣） 荒井英賀夫 今里支部（大阪市） 市場没食子 今治支部（今治市） 長野 文庫

後記 興亜の新春は一段と麗しくほがらかに。先づ愛讀者諸君の健康を祝福する。次いで己卯柳壇の一步前進へ鞭つことを約束したい。

むと私が揚足をとつた形になるが、昨春個人的に注意をしたまでだ。私としては「武玉川研究」の完璧を期待してゐるのに外ならない。

募集 第十六卷 第二號課題 一月廿日締切 鳥居 塚越正光選 本先 後藤青兒選

投稿規定 投稿は本社發賣の投句用箋、官製製書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

定價 一 部 金三十錢 半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢 一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢



戦線への感謝

慰問品を送

りませう

戦地で喜ばれる三越の慰問品

★ 二階 東館 ★



三越

大阪・高麗橋

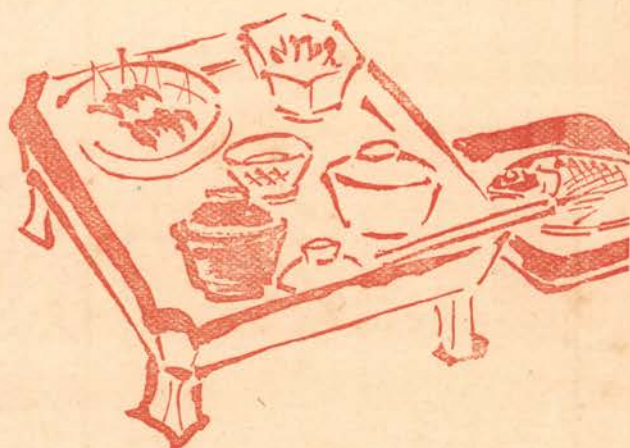


断然日本一

マルキン醤油

良いお醤油は

結局経済です



にきびと

美^び顔^が水^{すゐ}



美容薬^{びようぐすり}として

ニキビ吹出物に非常によく効きますので
大評判の薬です。ぜひお奨めしたい薬！

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗
面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ
吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増
しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬とし
ても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫でカユ
イ時にもとても便利な薬！

ニキビ

吹 ^{ふき}	に	此 ^こ
出 ^で	ぜ	薬 ^{くすり}
物 ^{もの}	ヒ	を

化粧用^{けしょうよう}美^み顔^{がん}水^{すゐ}

ア	粧 ^{けい}	の	ア
ブ	下 ^か	お	ブ
ラ	に	化 ^け	ラ
顔 ^{がん}			
最 ^{さい}	適 ^{てき}	！	